

GATHERING WITHIN

音楽と夢を奏でる学びの場

PROJECT 武蔵野音楽大学江古田キャンパス

音楽を奏でる人やそれを立ち止まり聴き入る人、友人と語り合う人やひとり読書をする人、そんな思い思いに人々が集まるヨーロッパの街をイメージした賑わいのある広場がここにある。この広場は敷地の中央に設けられ、学生達が自然と集まる中庭形式のキャンパスとなっている。広場に集まる未来の音楽家たちがともに語りあい、そして響きあい、広場を取り囲む建物とともに、オーケストラのような風景をつくりあげている。これは音楽と夢を奏でる大学の物語である。



設計者：小川 朗, 小山 岳登, 根本 智子, 鈴木 貴博, 小林 靖樹



住宅地に生まれた中庭広場

キャンパスは、閑静な住宅地の中で大きな音を外に出せず、高さの制約も非常に厳しい立地となっている。このような制約の中で、音楽大学という複合的な施設を建てることは容易なことではなかった。

そこで考えたのが、建物を敷地周囲に配置し、半地下に広場をつくるというアイデアである。外部に対して閉じることで周辺環境への影響を最小限におさえつつも、開放的なキャンパスとすることに成功した。キャンパスの中心に配置した半地下の中庭広場により、地下1階まで十分に光を取り入れることができ、豊かなキャンパスの環境をつくり出すことへつながった。

中庭広場を囲む建物は、教室、図書館、レッスン・練習室など機能ごとに独立している。これらの特徴的な個々の要素は中庭広場によって調和が図られ、キャンパス全体がひとつの街のような景観となっている。



キャンパス全体がコンサートホール

中庭広場に立つと、様々なジャンルの音楽がどこからともなく聴こえてくる。中庭広場を囲む建物群は敷地周辺からの音を遮断しつつ、周辺へ音が漏れることを防いでいる。これにより広場には心地よい音楽だけが響き渡る。それぞれの建物から音と人が広場へと自然に集まり、ひとつの音楽の街を形成している。また、各建物からは、ガラス越しに中庭広場を見渡することができる。中庭広場がステージ、周りの建物が客席、そして、キャンパス全体がコンサートホールのようなのである。





人と音楽が集う夢の舞台へ

中庭広場や教室で練習を重ね、各所から溢れてくる音に刺激され、音楽論について語り合う。そんな学生たちが向かうのは、1960年に日本で初めてクラシック専用につくられたコンサートホールのベートーヴェンホールと、最新の音響技術を駆使したブラームスホールである。

歴史あるベートーヴェンホールは、広場と繋がり人が集うホワイエ空間を中心にリニューアル。さらに、新キャンパスのもうひとつの顔となるブラームスホールを新設した。壁面の広がりや天井高さの工夫から、演奏者と聴衆のドラマティックな一体感を生み出している。残響時間と同時に、初期反射音、ステージから客席に直接届く直達音、その後を追って壁・天井から跳ね返ってくる二次・三次反射音は、重要な音響要素である。それらがすべての客席で豊かに響くように最適な音響デザインとなっている。デジタルでは伝えられないアコースティックの良さを感じる空間である。

キャンパスは、実践的な音楽教育の学びの場であると同時に、将来の音楽家たちが夢を叶える、きらびやかに輝く憧れの舞台なのである。